

## 詩篇79-83篇 「国々の間で」

### 1A 国々の侵入 79

1B 敵への激しい憤り 1-7

2B 罪の赦しによる救い 8-13

### 2A 御顔の照り輝かし 80

1B 御力の呼び覚まし 1-7

2B ぶどうの木の育て直し 8-19

### 3A 祭りの喜びと教訓 81

1B 神への喜びの歌 1-5

2B 聞かなかった民 6-16

### 4A 神々の裁き 82

### 5A 一つになった悪巧み 83

1B イスラエルの名の抹消 1-8

2B 敵への恐れ 9-18

## 本文

詩篇 79 篇から読みたいと思います。私たちは詩篇の第三巻を読み進めていますが、その賛歌の多くを作詞また作曲したのは、アサフという人です。あるいはアサフの子孫によるものです。その歌詞の中で多いのは、ユダがバビロンによって滅ぼされ、聖所が異邦人によって踏みにじられる、また捕囚の民となって嘆いているものであります。79 篇から 83 篇までも、その歴史的背景があります。神を知らない国々が、神の選ばれた者たち、神の選ばれた聖所、神のものとして聖別されているものを汚して、荒らしていく、その姿に耐えられなくなり泣き叫んでいる歌です。

### 1A 国々の侵入 79

1B 敵への激しい憤り 1-7

79 アサフの賛歌 79:1 神よ。国々は、ご自身のものである地に侵入し、あなたの聖なる宮をけがし、エルサレムを廃墟としました。79:2 彼らは、あなたのしもべたちのしかばねを空の鳥のえじきとし、あなたの聖徒たちの肉を野の獣に与え、79:3 聖徒たちの血を、エルサレムの回りに、水のように注ぎ出しました。彼らを葬る者もいません。79:4 私たちは隣人のそしりとなり、回りの者のあざけりとなり、笑いぐさとなりました。

この姿は、バビロンがエルサレムを攻め入ってきた時のものです。エレミヤが、この様子を哀歌の中で描いています。神殿を完全に破壊し、そこにある器具だけでなく、解体した青銅の柱などもすべてバビロンに持ち去りました。そして、大量のエルサレム住民を殺し、死体はそのまま鳥獣の屍になりました。エレミヤは、そのようになってしまうという警告を彼らにしつづけていましたが、彼

らはその時は聞く耳を持ちませんでした。そして、周囲にいた民、例えばエドム人やアモン人など、ユダと軍事的同盟を結んでいたはずなのに、ユダが捕え移される時にやってきて、彼らをあざけ笑っていました。

ここで大事なのは、アサフがこれら一つ一つを神のものとして関連付けていることです。「ご自身のものである地に侵入」「あなたの聖なる宮」「あなたのしもべたちのしかばね」そして、「聖徒たち」これは聖なるものとされた者たちという意味です。これは、すべて正しいことです。神は、確かにイスラエルをご自分の土地としており、宮にご自分の名を置かれ、彼らをご自分の僕としておられました。このようなことが起こることは、神ご自身が最も喜んでいませんでした。けれども、神は正しい方です。彼らの犯していた罪と不正のため、その土地を流血で汚したため裁かなければいけなかったのです。神はご自分のものを愛しておられ、決して見捨てることはされません。しかし、彼らの悪や不正を受け入れることはしません。ここに悲しみと嘆きが出てきます。

79:5 主よ。いつまででしょうか。あなたは、いつまでもお怒りなのでしょうか。いつまで、あなたのねたみは火のように燃えるのでしょうか。79:6 どうか、あなたを知らない国々に、御名を呼び求めない王国の上に、あなたの激しい憤りを注ぎ出してください。79:7 彼らはヤコブを食い尽くし、その住む所を荒らしたからです。

モーセはイスラエルに、「申命 4:24 あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたむ神だからである。」と言いました。そこから出てくる愛は、何をやってもいいよ、いう愛ではなく、罪による滅びを何よりも憎む情熱から出てくる愛です。多くの人が、神は心が狭いと言います。しかし、どうなのでしょう、私の妻が仮に他の男のところに行って、それでねたまなければ、本当に私が彼女を愛していたのか疑わしいですね。自分は彼女のものとなっており、彼女が自分のものとなっているという結びつきがあるからこそ、真実な、誓約に基づく愛であります。

アサフの苦しみは、単にエルサレムが滅ぼされたということに留まりません。むしろ、神を知らない者たちがこれらの破壊を行ったということに対する苦しみを言い表しています。自分たちよりも正しい者たちが自分たちを裁く、ということであれば理解できるかもしれません。けれども、神を認めず、御名を呼び求めない不信者によってこれらの仕打ちを受けていることが苦しいのです。

私はアサフの祈り、「あなたの激しい憤りを注ぎ出してください」というのは、御心にかなった正しい祈りだと思います。確かにエレミヤは、バビロンに対する神の憤りをもって、50-51章においてその預言を終えています。バビロンに対する徹底的な滅ぼしを預言した後、それを書き記した巻物をユーフラテス川に沈ませ、そして、「このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない。(51:64)」と宣言しました。私は、この世界で起こっているあらゆる不正や不義に対して、このような祈りを捧げてしかるべきだと思います。もちろん、その人たちに神が憐れみを示し、悔い改めて立ち返ることを願うのですが、不正や悪に対しては神の激しい憤りがあるのだということを知って、神への恐

れ、また神の慰めを得るべきだと私は思います。

## 2B 罪の赦しによる救い 8-13

しかし、神に愛された選びの民に対して、神はそれ以上の御心を持っておられます。このような悪者が聖なる都、聖なる民を滅ぼすということをお許しになることになるのは、かえって神が彼らに対して、深いご計画を持っておられることを示しています。

79:8 先祖たちの咎を、私たちのものとして、思い出さないでください。あなたのあわれみが、すみやかに、私たちを迎えますように。私たちは、ひどくおとしめられていますから。79:9 私たちの救いの神よ。御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救い出し、私たちの罪をお赦しください。

アサフは理解していました。このような酷い状況になったのは、先祖が犯した罪のゆえ、また自分たちの世代で犯した罪のゆえであることを知っていました。エレミヤなどが、何度となく預言したことを理解していたようです。神に選ばれた、愛された民のゆえ、罪を犯す時には、神を知らない人々よりも厳しい裁きを受けるということです。イエス様が言われました、「ルカ 12:48 しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」したがって、たとえバビロンがイスラエルよりもはるかに悪いことをしていたとしても、そしてユダがバビロンに比べたら、はるかに正しく生きていたとしても、神に捉えられているがゆえに、厳しい取り扱いを受けることはあり得ますし、それは神の深い教育的配慮から来ているのです。

私たちの周りでも、自分にとって不利な出来事が起こるかもしれません。相手が確実に間違っていると断言できる出来事も起こります。けれども、その出来事の是非は別にして、確かに自分が神に対して不遜の罪を犯していたのではないか、その罪を悔い改めて、神ご自身に戻ってくるための注意喚起をしておられるのではないか、ということがあります。したがって、私たちはこのようなことを通して、なおのこと神の前に出てへりくだるという機会が与えられています。そして、霊的に成長し、キリストの似姿へと一歩前進するのです。

79:10 なぜ、国々は、「彼らの神はどこにいるのか。」と言うのでしょうか。あなたのしもべたちの、流された血の復讐が、私たちの目の前で、国々に思い知らされますように。79:11 捕われ人のうめきが御前に届きますように。あなたの偉大な力によって、死に定められた人々を生きながらえさせてください。

当時の異教徒たちは、どのように神の存在を確かめたかと言いますと、第一に、その作った偶像があります。第二に、戦争に勝つことです。戦争をするというのは、その国の代表する神々の間の戦いとみなされていました。ですから、相手国に勝つことは相手の神を自分たちの拝む神が打

ち勝ったと考えたのです。エルサレムの神は、バビロンの神によって打ち倒されたと彼らは考えました。そこで、「彼らの神はどこにいるのか。」とあざけているのです。

しかし、私たちの神は異なります。国が敗れば神は弱く、国が勝てば神は強い、というような単純公式の中におられる方ではありません。神はむしろ、敵に敗れることを許すことによって、ご自分が生きておられることを証しておられるのです。「ローマ 3:4 あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」神が裁きを与えられることによって、神の正しさが明らかにされているということです。

しかし、神はご自分の民を永遠に滅ぼされたものではありません。エレミヤの預言によれば、それは七十年という期間でありました。七十年の後に、神はバビロンを滅ぼして、ご自分の民をご自分の土地に帰らせてくださいます。ですから、アサフのこの祈りも神に聞かれました。

79:12 主よ。あなたをそしった、そのそしりの七倍を、私たちの隣人らの胸に返してください。  
79:13 そうすれば、あなたの民、あなたの牧場の羊である私たちは、とこしえまでも、あなたに感謝し、代々限りなくあなたの誉れを語り上げましょう。

「そうすれば」という言葉は、あたかも、交換条件のように聞こえます。あなたが、敵をやっつけてくだされば、私たちは代わりにあなたに感謝して、ほめたたえましょうというように聞こえます。けれども、そうではありません。自分たちは自分たちで救うことはできないことを彼らは知っていました。8 節に、「あなたのあわれみが、すみやかに、私たちを迎えますように」とあります。また、9 節に、「御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救い出し、私たちの罪をお赦しください。」と嘆願しています。言い換えれば、「あなたご自身が動いてくださり、憐みを注いで、罪の赦しを与えてくださることによって、初めて私たちはあなたをほめたたえるように導かれます。」ということです。私たちは神の憐れみと罪の赦しなしには、その恵みが先行していなければ、悔い改めることも、神に仕えることも、賛美することもできません、という自分の無力さの告白なのです。

私たちが何かをして、それで神に何かをしてもらうということではなく、ひたすら神の前に出て、頭を垂れて、自分たちの至らなさを告白し、罪も告白し、神が働きかけてくださることを願い求めることであります。そして神は真実な方ですから、ご自分の選びの民のためには動いてくださいます。それで私たちは霊的に前進することができるのです。「神の慈愛が私たちを悔い改めに導く」と使徒パウロは言いました(ローマ 2:4)。

## **2A 御顔の照り輝かし 80**

八十篇も、敵によってイスラエルが踏み荒らされたところからの救いを歌っている賛歌です。

## 1B 御力の呼び覚まし 1-7

80 指揮者のために。「さとしは、ゆりの花。」の調べに合わせて。アサフの賛歌 80:1 イスラエルの牧者よ。聞いてください。ヨセフを羊の群れのように導かれる方よ。光を放ってください。ケルビムの上の御座に着いておられる方よ。

七十九篇の終わりの節は、イスラエルの民を「あなたの牧場の羊」と表現しましたが、ここでは主を、「羊の群れのように導かれる方」と言い表しています。

80:2 エフライムとベニヤミンとマナセの前で、御力を呼びさまし、私たちに救うために来てください。

80:3 神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

ここでアサフは、民数記にある麗しい神の働きを思い出しています。イスラエルがシナイ山のふもとに宿営していて、神がその十二部族を幕屋の周りに、東西南北にそれぞれ三部族ずつ、決められたところに宿営させました。それから、雲が動き始めてイスラエルの民が旅立ちます。初めに、東側に宿営する三つの部族、ユダ、イッサカル、ゼブルンが立ち上がります。それから、南側に宿営しているルベン、シメオン、そしてガド族が旅立ちます。それから、真ん中に入るようにレビ人が立ち上がるのです。レビ族だけは、これら十二部族よりさらに、幕屋に接近したところに宿営していました。その時に、レビ人は契約の箱を始めとする、幕屋の祭具を担ぎ、板や幕を運びます。そしてこれら契約の箱を運んでいるレビ人の後に続いて、西側にいる三つの部族が立ち上がるのです。それが、ここに書いてある、エフライムとマナセとベニヤミンです。ですから、このアサフの言葉を聞いて、イスラエルの人たちはこれから旅立つ、主にあつて勇ましく進む先祖の姿を思い浮かべたはずです。

そして、「私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。」と言っています。彼らが動き始めることを教えられの中で、神はアロンにイスラエルの民をご自分の名によって祝福しなさいと命じられました。「6:23-27 アロンとその子らに告げて言え。あなたがたはイスラエル人をこのように祝福して言いなさい。『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』彼らがわたしの名でイスラエル人のために祈るなら、わたしは彼らを祝福しよう。」主が御顔を照り輝かせる中で、彼らが敵からの救いを体験できたのでした。

この照り輝かし、というのは主が彼らをよく見ておられている姿です。「御顔を背ける」という表現も聖書にはありますが、それは彼らのしている悪から目を背けられるということです。そうではなく、主が恵みをもって臨んでくださる姿です。主が戻ってこられると、キリストが義の太陽のように輝くことを預言者マラキは教えました。「4:2 しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。」私たちは、輝く太陽の下で日光浴をすると、体も気持ちも癒されますね。そのように、主が照り輝かせてく

ださることを、アサフは願っています。

80:4 万軍の神、主よ。いつまで、あなたの民の祈りに怒りを燃やしておられるのでしょうか。80:5 あなたは彼らに涙のパンを食べさせ、あふれる涙を飲ませられました。80:6 あなたは、私たちを隣人らの争いの的とし、私たちの敵は敵で、私たちをあざけています。80:7 万軍の神よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

七十年続く捕囚の中で、彼らは涙に明け暮れていました。周りの敵は彼らのことで嘲っています。そこで繰り返して、御顔を照り輝かせてくださいと祈っています。「私たちをもとに戻し」と言っていますね、これは約束の地に戻すということでもあり、神との正しい関係に戻してほしいという回復の願いです。

## 2B ぶどうの木の育て直し 8-19

80:8 あなたは、エジプトから、ぶどうの木を携え出し、国々を追い出して、それを植えられました。80:9 あなたがそのために、地を切り開かれたので、ぶどうの木は深く根を張り、地にはびこりました。80:10 山々もその影におおわれ、神の杉の木もその大枝におおわれました。80:11 ぶどうの木はその枝を海にまで、若枝をあのかくにまで伸ばしました。80:12 なぜ、あなたは、石垣を破り、道を行くすべての者に、その実を摘み取らせなさるのですか。80:13 林のいのししはこれを食い荒らし、野に群がるものも、これを食べます。

イスラエルがぶどうの木に喩えられている部分です。主は、聖書の多くの箇所ではイスラエルをぶどうの木に喩えておられます。それは、そこから出てくる実を神は期待しておられるからです。イスラエルから、正義や公正という実を神は期待しておられました。イザヤ書 5 章に、神がご自分をぶどう園の農夫に喩え、汗水流してそれを世話して育てていたところ、甘いぶどうではなく、酸いぶどうができてしまったと嘆いている部分があります。それゆえ、そのぶどう畑は荒れ廃れるに任せると主は言われました。今、ここで同じことが書かれています。イスラエルがヨルダン川から入り、そこにいる住民を追い出して、住み始めました。そして、イスラエルの土地に地中海から、「あの川」とありますが、ユーフラテス川のところまでイスラエルの国の影響力が及びました。モーセにそのように神が約束しておられ(出エジプト 23:31)、それがソロモンの時代に実現しました。それが、周りの異邦人に踏み荒らされてしまったのです。

イスラエルがぶどうの木という喩えは、新約聖書にも出てきます。イエス様が十字架に付けられる前に、ユダヤ人指導者に対して語られました。主人が神であり、農夫が彼らです。主人が実をもらうために使いを送るのですが、彼らは迫害します。そして、ついに主人は自分の息子を送りますが、「あいつは跡取りだ」と言って、それで殺してしまいます。それで主人は農夫たちを殺して、他の農夫たちに貸すようになります。これは旧約時代の預言者を迫害したユダヤ人の指導者たち、そしてついに神の御子キリストご自身を殺す罪に対して、ユダヤ人の持っている神殿とエルサレ

ムをローマによって破壊するという預言だったのです。イエス様はこう言われました。「マタイ 21:43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。」

ですから、神は私たちを選び、救われたのはその実を収穫したいからに他なりません。イエス様は弟子たちにもぶどう園の喩えを話されて、ご自身がぶどうの木であり、弟子たちがその枝であることを話されました。そしてイエスとその御言葉に留まっていれば多くの実を結び、離れていて実を結ばなければ火で焼かれることを話されました。私たちの新年の抱負が、「霊的に成長する」ことであります。実を結ばせることが神の望まれていることです。

実を結ばせるという表現が、とても大事ですね。私たちの務めは、キリストにあつて神の前に出ていくことです。神につながっていることです。その中で神が成長させてくださいます。神が、私たちの内で、また私たちを通して事を行ってくださいます。ですから、その実も私たちのものではなく、神ご自身の聖霊の働きの結果であります。自分たちで何かをすることを目標とするのではなく、神を礼拝しながら、聖霊が導かれること、聖霊に語られることに耳を傾け、そして御言葉に従順になることが成長の鍵であります。

80:14 万軍の神よ。どうか、帰って来てください。天から目を注ぎ、よく見てください。そして、このぶどうの木を育ててください。80:15 また、あなたの右の手が植えた苗と、ご自分のために強くされた枝とを。80:16 それは火で焼かれ、切り倒されました。彼らは、御顔のとがめによって、滅びるのです。80:17 あなたの右の手の人の上に、御手が、ご自分のため強くされた人の子の上に、御手がありますように。

ここの「人の子」というのは誰でしょうか？アサフは、キリストを願い求めています。人の子であるキリストの上に神の御手があるようにと祈っています。

80:18 そうすれば、私たちはあなたを裏切りません。私たちを生かしてください。私たちは御名を呼び求めます。80:19 万軍の神、主よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

七十九篇と同じです、「そうすれば」という言葉が出ています。彼らが何かをするから、神が良くしてくださるのではなく、神が一方的に憐れみを示されるから、それで彼らが生きることができ、救われることができ、そして御名を呼び求めることができます。ぜひ私たちの祈りの課題にしたいですね、これがリバイバルのための祈りです。

### **3A 祭りの喜びと教訓 81**

81 指揮者のために。ギテの調べに合わせて。アサフによる

この詩篇は、おそらく前の二つの賛歌における祈りを神が聞いてくださり、エルサレムに帰還を果たすことのできたユダヤ人たちの歌ではないかと思われます。これから歌うのは、祭りの時の歌であり、おそらく秋の祭りでの歌です。

### 1B 神への喜びの歌 1-5

81:1 われらの力であられる神に喜び歌え。ヤコブの神に喜び叫べ。81:2 声高らかにほめ歌を歌え。タンバリンを打ち鳴らせ。六弦の琴に合わせて、良い音の立琴をかき鳴らせ。81:3 われらの祭りの日の、新月と満月に、角笛を吹き鳴らせ。81:4 それは、イスラエルのためのおきて、ヤコブの神の定めである。81:5 神が、エジプトの地に出て行かれたとき、ヨセフの中に、それをあかしとして授けられた。私は、まだ知らなかったことばを聞いた。

喜び歌っていますが、それは祭りの日のための歌です。ヤコブの神の定めであるとありますが、神は三大祭として、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りを定められました。そして、秋の祭りは第七の月の一日、新月の時にラツパを吹き鳴らす日があります。そして十日に贖いの日があり、全き安息をし、悔い改め、神に清めていただきます。そして十五日から八日間、仮庵の祭りを祝います。これを喜びをもって歌っていた時に、神はアサフに「まだ知らなかったことば」を聞かせました。これまで主がモーセを通して語らせ、また先代の預言者を通して語られた中でまだ聞いたことの無かったことです。

### 2B 聞かなかった民 6-16

81:6 「わたしは、彼の肩から重荷を取り除き、彼の手を荷かごから離してやった。81:7 あなたは苦しみのときに、呼び求め、わたしは、あなたを助け出した。わたしは、雷の隠れ場から、あなたに答え、メリバの水のほとりで、あなたをためした。セラ 81:8 聞け。わが民よ。わたしは、あなたをたしなめよう。イスラエルよ。よくわたしの言うことを聞け。81:9 あなたのうちに、ほかの神があってはならない。あなたは、外国の神を拝んではならない。81:10 わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。81:11 しかしわが民は、わたしの声を聞かず、イスラエルは、わたしに従わなかった。81:12 それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんばかりのままに歩かせた。81:13 ああ、ただ、わが民がわたしに聞き従い、イスラエルが、わたしの道を歩いたのだったら。81:14 わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、わたしの手を向けたのに。」

午前礼拝で読んだところです。主が荒野の旅をイスラエルにさせて、その中で自分自身ではなく主に拠り頼むことを訓練しました。ところが約束の地に入ると、彼らはその豊かさの中で主に拠り頼むことを忘れてしまいました。それで偶像礼拝に陥ったのです。

そして今まで聞いたことの無かったこと、というのは、二つあると思います。一つは、彼らの頑なな心のままに任せたこと、もう一つは、彼らが主の道に歩いたのであれば、いつでも、すぐに敵の

手から彼らを助けだしたことであります。神は私たちが絶えず、繰り返し御声に聞かないと、私たちのしたいままにすることによって、自分たちの行なったことの結末を刈り取るようにされます。このようにして懲らしめを与えるのです。また、主はどんなに裁きの宣告をされても、悔い改める者にはすぐに憐れみを示される方であり、それをずっと待っておられたということです。「どうして、あなたは怒りを示されるのですか。」というアサフの問いに対して、「あなたがわたしに立ち返るなら、いつでも救い出したのに。」という、神はご自分のやるせない思いを打ち明けられたのです。

81:15 主を憎む者どもは、主にへつらっているが、彼らの刑罰の時は永遠に続く。81:16 しかし主は、最良の小麦をイスラエルに食べさせる。「わたしは岩の上にできる蜜で、あなたを満ち足らせよう。」

イスラエルの民は神に愛されています。神の憐れみさえ示されれば、生かされ、神の名を呼び求めることができます。けれども、主を憎む者はそうではありません。主の慈しみを信ぜず、受け入れていないので、神の御霊が与えられていません。ですからどんなことをしても、へつらうことはできても敬うことはできないのです。

けれども、主は最良の小麦を食べさせてくださいます。ここに、「わたしは岩の上にできる蜜」とあります。乳と蜜の流れる地とモーセは呼びましたが、乳は牛やヤギなど、牧畜のことを指して、蜜は地面から出きる実のことを指しています。これが、「岩から」できるというのが味噌です。なぜなら、イスラエルは岩地だからです。そこに神が雨を降らせて恵みを与えるからこそ、作物ができます。そして、岩に蜜という言葉は、キリストの上にごそ実が結ばれるということも表しています。キリストが私たちの拠り頼むべき岩であり、その岩にいるからこそ聖霊の実を結ばせることができるということです。

#### **4A 神々の裁き 82**

八十二篇もまた、国々に対する預言となっています。けれども、彼らを「神々」と呼ばれています。それは、人々に対して生かすことも殺すこともできる、裁きを行なう権威が与えられている者たちに対する言葉だからです。

82 アサフの賛歌 82:1 神は神の会衆の中に立つ。神は神々の真中で、さばきを下す。82:2 いつまでおまえたちは、不正なさばきを行ない、悪者どもの顔を立てるのか。セラ 82:3 弱い者とみなしごとのためにさばき、悩む者と乏しい者の権利を認めよ。82:4 弱い者と貧しい者とを助け出し、悪者どもの手から救い出せ。

ここの「神」のヘブル語はエロヒムです。主がモーセに十戒を与えられた後で、「彼らの前に立てる定め(出エジプト 21:1)」と言われて、裁き人に対する定めを与えられました。訴訟問題が出てきた時に、裁きを与えるための定め、つまり法律を与えられました。その中で「神のもとに連れてゆく」

という言葉があります(21:6 等)。それは幕屋のところにいて、主を礼拝するというのではなく、裁き司のところに行くということです。彼らは、人々の人生を神が行われるように、いかようにでもできる大きな権威が与えられています。その権威は神から来ているものなので、神の代弁者として神と呼ばれているのです。「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」

この箇所を使って、ニューエイジの人たちは私たち人間が神になるということを教えます。しかし、聖書には何度も何度も、「わたしだけが神である。」という宣言に満ちています。この神のみがまことの神です。しかし異教では、人が神になることを教えています。神はもしかしたら、そうしたことも皮肉を込めて、彼らのことを神々と呼ばれているのかもしれない。

そして彼らのしなければいけないことは、貧しい者や悩んでいる者を助け出すことです。自分の益のためにその大きな権威を用いてはならず、大きな権威が与えられているのはあくまでも、虐げられている人々を助けるためです。イエス様もその誘惑を受けられました、悪魔から、神の子であるなら石をパンに変えなさいと言われたのですが、御子としての力を自分の食欲のために使うことはできたのです。けれども、主は悪霊を追い出し、病を直すためにその力を用いられ、ご自分のためには使われませんでした。

これは、キリスト者に対する警告でもあります。私たちには、主にある喜びがあります。その喜びはいつも、まだ主を知らない人々、求道をしている人々、また弱っている人々、御体の弱くなっている部分に用いられるべきであり、自分たちを喜ばせるためにあるものではありません。しかし教会が、自分たちだけで十分だ、他の困った人たちがいると教会が汚れる、という態度を持つならば、たちまち死んでしまいます。

82:5 彼らは、知らない。また、悟らない。彼らは、暗やみの中を歩き回る。地の基は、ことごとく揺らいでいる。

地の基が揺らいでいるというのは、神の掟があり、それを、裁判官をしっかりと司法で適用させているからこそ社会が安定するのに、それを全然行っていないので揺らいでいるということです。また、これは神の彼らに対する裁きも表しているのでしょう。コラの反乱の時に、地が割れて彼らは生きたまま地獄に投げ込まれました。同じように裁かれるということを意味しているかもしれません。

82:6 わたしは言った。「おまえたちは神々だ。おまえたちはみな、いと高き方の子らだ。82:7 にもかかわらず、おまえたちは、人のように死に、君主たちのひとりのように倒れよう。」

神は、ご自分の代理人として裁判官を立てておられます。だから、「おまえたちは神々だ。いと高き方の子らだ。」と言われています。けれども彼らは自分たちの上に裁き主がおられることを知ら

ずに、あたかも自分たちが神々であるかのように、いと高き方の子であるかのように考えています。人の運命や命を自分の手でいかようにでも料理できるとも思っているのです。ですから神は、「おまえは自分を神のようにふるまっているが、おまえが単なる人の子であることを知らしめるために、死をもたらそう。」とされているのです。

ここの箇所は、イエス様が引用されているところです。ヨハネによる福音書 10 章にて、ユダヤ人たちがイエス様を石打ちにしようとした。主が「良いわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」と言われたら、ユダヤ人は、「いいえ、あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」と言いました。そしてイエス様は、こう言われました。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、あなたがたは神である。』と書いてはありませんか。もし、神のこぼを受けた人々を、神と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、『わたしは神の子である。』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している。』と言うのですか。(34-36 節)」つまり、人である裁判官さえ神と呼ばれていたのに、ましてや聖なる方が神の子であると言って、なんでそれで怒るのだ？ということなのです。

82:8 神よ。立ち上がって、地をさばってください。まことに、すべての国々はあなたが、ご自分のものとしておられます。

私たちは、どうしてもキリストは教会に関わるところで支配しておられ、この世のことについては関心を持つ必要はないと考えます。この前、あるクリスチャンと話していましたが、確かに教会では社会で起こっていることを話していると、「人の魂の救いだけが大事なのだ」という反応が帰ってきていたそうです。今もそういうところが多いかもしれません。けれども、この世に対して神はこの御言葉にあるように、ご自分のものとしておられます。

教会は社会というものの中に存在しています。それを教えているのが、テモテへの手紙第一です。公のこと、秩序のことをパウロは若い牧者テモテに教えていましたが、こう言っています。「2:1-4 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」

王や高い地位にいる人々は、クリスチャンではもちろんありません。そのほとんどが異教徒であります。けれども、彼らも神によって立てられた人々であり、彼らのために願い、祈り、執り成し、そして感謝が捧げられるようにしておかないといけないのです。そのような人々に対して、無関心でいることは神の御心ではありません。また、反発して批判するだけのことも、神の御心ではありません。それは世の中の人たちも行なっているのです。キリスト者は、執り成しをしている人々なの

だという証しが立てられている必要があります。

そのことを行なえば、平和で静かな一生を過ごすことができるとあります。エルサレムにいるキリスト者は、ユダヤ人反乱の時にそれに加わらず、エルサレムが包囲されていた時、それが一時解除されたら、イエス様の言葉に従って逃げました。それで難を逃れたのです。このように、不必要に権威者に敵対するのはキリスト者の姿ではなく、できるかぎり平和を保つのです。そして、この姿勢の中で生きていくと、主は必ず救霊の業を行ってくださいます。使徒パウロは、ローマ兵につながれていながら、自由に神の御言葉を伝えることができていたと使徒行伝の終わりには書いてあります。必ず福音伝道の機会を与えてくれるのです。

### **5A 一つになった悪巧み 83**

最後の詩篇は、周囲の国々が悪巧みをして、イスラエルを消し去ろうとする陰謀が書かれています。ユダヤ人がエルサレムに帰還しても、そしてイスラエルの国を立てても、それでもいつかこの名を消し去ろうとする企みを、周囲の国々が抱くという預言です。

#### **1B イスラエルの名の抹消 1-8**

83 歌。アサフの賛歌 83:1 神よ。沈黙を続けしないでください。黙っていないでください。神よ。じっとしていないでください。83:2 今、あなたの敵どもが立ち騒ぎ、あなたを憎む者どもが頭をもたげています。83:3 彼らは、あなたの民に対して悪賢いばかりごとを巡らし、あなたのかくまわれる者たちに悪たくみをしています。83:4 彼らは言っています。「さあ、彼らの国を消し去って、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしましょう。」83:5 彼らは心を一つにして悪たくみをし、あなたに逆らって、契約を結んでいます。83:6 それは、エドムの天幕の者たちとイシュマエル人、モアブとハガル人、83:7 ゲバルとアモン、それにアマレク、ツロの住民といっしょにペリシテもです。83:8 アッシリヤもまた、彼らにくみし、彼らは口の子らの腕となりました。セラ

イスラエルは、絶えず周囲の敵からこの脅威に晒されてきました。南ユダ王国時代は、ヨシヤパテが王の時に、アモン、モアブ、そしてエドムの人々が一斉にユダに攻め入ろうとしました(2歴代20章)。けれども、ここではさらに加えられています。エドムとモアブとアモンは、今のヨルダンにあります。イシュマエル人はアラビアに、すなわちサウジアラビアです。ハガル人とはエジプト人のことです。イシュマエルの母ハガルのことですね。そして、ゲバルは死海の南東のほう、今のイラクに重なります。そして、アマレクはエジプトやサウジアラビアです。さらに、ツロはレバノン、そしてペリシテは今のガザ地区ですからパレスチナ、さらに、アッシリヤはイラク北部とシリアです。

いかがでしょうか、これらは全て現代イスラエルの建国と共に一斉に攻めてきたアラブ諸国であります。彼らは、何とかしてイスラエルという名を消し去ろうとしました。ところが、この企みはアサフが祈り求めたように、神の前で阻まれました。四つの中東戦争はすべてイスラエルの勝利に終わりました。今はイスラム原理主義のハマスまたヒズボラがありますが、敗けたことはありません。

そしてエルサレムは将来も守られます。世界の軍隊から攻撃を受ける時に、キリストが戦うために戻ってこられます。そして、千年王国の終わりに神に愛されたエルサレムの町が敵に取り囲まれます。けれども、主からの火によって焼き尽くされます。そして悪魔は、火と硫黄の燃える池に投げ込まれます。けれども、ご自分の民を守られるのです。

## 2B 敵への恐れ 9-18

83:9 どうか彼らを、ミデヤンや、キシオン川でのシセラとヤビンのようにしてください。83:10 彼らは、エン・ドルで滅ぼされ、土地の肥やしとなりました。83:11 彼らの貴族らを、オレブとゼエブのように、彼らの君主らをみな、ゼバフとツアルムナのようにしてください。

アサフは、士師の時代の神の救いを思い出しています。カナン人の王ヤビンと將軍シセラは、デボラとバラクと対峙しました。デボラとバラクはタボル山にいて、シセラはイズレエル平野にいました。神はキシオン川に水が溢れさえ、彼らの戦車がぬかるみに浸かり、使い物にならないようにさせました。そしてシセラは、ヤイルという女の手によってこめかみに杭が打たれて死んだのです。そして、ギデオンの時を思い出しています。ミデヤン人との戦いですが、たった三百人で十三万五千人のミデヤン人を打ち倒したのです。その首長、オレブに対しては彼の持っている岩の上で打ちつけて殺し、首長ゼエブは、彼の持っている酒ぶねの上で殺しました。そして、追跡を続けて、ミデヤン人の王、ゼバフとツアハムナを殺しました。

83:12 彼らは言っています。「神の牧場をわれわれのものとしよう。」

今日学んだ詩篇の中で、一貫してイスラエルの民のことを神の牧場、羊の群れであると書いてあります。これは、キリストを信じる者たちにもイエス様はその祝福を引き伸ばされました。私たちの主イエスが私たちの牧者、羊飼いで、私たちは羊です。私たちもまた、同じように世に憎まれます。キリストを世が憎んでいるので、キリストに属している者も憎むのです。

83:13 わが神よ。彼らを吹きころがされる枯れあざみのように、風の前の、わらのようにしてください。83:14 林を燃やす火のように、山々を焼き尽くす炎のように、83:15 そのように、あなたのはやてで、彼らを追い、あなたのあらしで彼らを恐れおののかせてください。

神の豊かさや祝福にあずかることが、水路のそばに植えられた木として喩えられる一方で、神の裁きは水気の全くない、熱風として喩えられています(詩篇 1:3-4)。偽教師のことを、使徒ペテロまたユダが同じように形容しています。ユダの手紙 12-13 節を読みます。「彼らは、あなたがたの愛餐のしみです。恐れげもなくともに宴を張りますが、自分だけを養っている者であり、風に吹き飛ばされる、水のない雲、実を結ばない、枯れに枯れて、根こそぎにされた秋の木、自分の恥のあわをわき立たせる海の荒波、さまよう星です。まっ暗なやみが、彼らのために永遠に用意されています。」

83:16 彼らの顔を恥で満たしてください。主よ。彼らがあなたの御名を慕い求めるようにしてください。83:17 彼らが恥を見、いつまでも恐れおののきますように。彼らがはずかしめを受け、滅びますように。83:18 こうして彼らが知りますように。その名、主であるあなただけが、全地の上にありますいと高き方であることを。

燃え尽くす火によって滅ぼしてくださいという祈りは、彼らが全滅するためではなく、飽くまでもこの裁きによって神を恐れ慄き、認めるようにと祈っています。私たちはこのバランスが必要です。私たちの神は愛であります、光であり、焼き尽くす燃える火でもあります。この方の愛が知られる時に、同時に、聖さが伝わり、そして裁きという厳然とした真理にも触れられることになります。神の愛を語る時に、裁きの厳しさも伝わります。もしそうでなければ、まことの神を伝えていることになりません。十字架につけられたキリストは、十字架につけられた方なのです。恐ろしい死刑台なのです。そこで主は、「渴く」と言われて死なれました。それは何も脱水症状になっただけでなく、霊的にも渴いておられました。罪を負っておられたので、神の裁き、焼き尽くすその水気のない状態を味わっておられたのです。

このようにして、主は私たちをご自分の羊として守っておられます。敵がいようと、自分を踏みにじっても、神はそこから助け出してくださいます。私たちは、主の前でへりくだり、神の憐れみを待ち、罪の赦しを請い、それで神によって生かしていただき、主に仕えるのです。